

からだとは・病とは(54) ちらせなかった虫垂炎 鈴木齊観^{せいかん} (齊観堂治療院)

治療に来ている看護婦から電話があった。同じ総合病院に勤務している医師が虫垂炎で、ちらすのがうまく行かず、周りから手術を勧められている。本人は手術を嫌がっており、紹介したいと。

医師の家族からの電話で予約して来たので、電話もできない程なのかと思ったが、治療には本人一人でやって来た。1週間前に腹痛があり、虫垂炎と診断された。鎮痛剤・抗生剤により、痛みは収まったが、だるさと吐き気があり、昨日からは更に調子が悪く、食べられないとのこと。

診ると、腹は全体に硬くなっていた。虫垂近くの炎症的な様子は少なく、ミゾオチ付近が硬く邪気も強い。背は全体に凝って硬いが、特にミゾオチの裏側がきつく凝っている。鍼は最初、刺入すると痛そうだったので、背全体に軽く当てる様にして邪気を取り、足首に鍼をかざして気の流れを促がした。果たして、背が少し緩んだので、今度は少し深く刺鍼した。お腹を診ると、全体に少し緩み、問題のミゾオチもかなり緩んだ。吐き気がだいぶ収まり、その効果に医師は驚いていた。

翌日も来てもらった。便秘し、臀部違和感で寝たい感じがあり、頭痛・嘔気があったが、今(来院時)は減っているとのこと。お腹はミゾオチから臍にかけて凝りが強く、下腹下部に邪気を感じた。背部は全体に凝り、臀部も凝っている。凝りは昨日程でなく、鍼の刺入ができた。全体に鍼をしてから足首の鍼かざしで、背全体を緩めた。背が緩めば、お腹も緩む。人参湯、便通がない場合にはそれに大黄(たいおう)を加えた人参湯加大黄を飲むよう勧めた。

3日後來院。食べられるようになり、便通もあるようになったが、軽い嘔気があるとのこと。

背の凝っているところに鍼をして、足首に鍼をかざして、背を緩めた。背が緩めば、お腹も緩む。虫垂がある下腹部付近に異常感がある。今度は前回の漢方薬と交互に腸癰湯(ちょうようとう)を飲むよう勧めた。虫垂炎では、急性期には大黄牡丹皮湯(たいおうぼたんぴとう)、その後、腸癰湯が使われる。

8日後來院。だるさは昨日でなくなり、便通も食欲もだいじょうぶとのこと。

ちらしきれなかった虫垂炎とは言え、虫垂炎で来てくれる患者はこれまでなかった。鍼の治療は、邪気や毒の状態、そしてその現われである凝りの状態がつかめれば、それに従って鍼するだけで、病名は関係ない。からだはどう反応しているかに従って、それを助ける様に鍼をすれば、治っていく。からだ自身はいつも生命を維持しようと反応するからである。虫垂炎の治療については、師の講義を機関誌で読んであり、そのイメージは持っていた。講義の中で、大黄牡丹皮湯や腸癰湯という薬方があることも聞いていた。予め知識があることによって、目の付け所が分かり、誤診・誤治しにくくなる。漢方薬での治療も同じである。

虫垂炎の医師はやや虚弱な体質であった。あのまま病院での治療を続け、手術したとしても治るには治っただろう。しかし手術や更なる抗生剤などの使用によって、更に虚弱な体質に陥ったと思う。「治る」ことの質が違う。医師は体質改善と体調を整える為に、今も時々、治療に来ている。

東洋医学を広める為には、現代日本の医療において最も権威と権力ある資格である医師の理解と協力は大きな力となる。医師本人にとっても良かったわけだが、そういう意味でも意義ある治療であった。(2010年8月処暑)